

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第2章



フランス、アヴィニオン市 ～ 1342年

時は14世紀のヨーロッパ、アヴィニオンはまさに中心地だった。

キリスト教帝国。ローヌ川のほとりに位置するアヴィニオンは、西方のバビロンと呼ばれた。街には商人や占い師、酔っ払いや職人、兵士や大使、そして悪女や泥棒がひしめき合っていた。高い城壁が街を取り囲み、外部からの侵略を防いでいた。城壁の中に多くの人々がひしめき合っていたため、適切な下水処理は困難を極め、悪臭が目には見えないが確かに感じられる重苦しい空気のように、密集した街全体に漂っていた。

悪臭の海からそびえ立つように、教皇宮殿（パレ・デ・パプ）が大地にそびえ立っていた。ローマ帝国によって放棄された岩の上に建てられたこの巨大な建造物は、聖座の礎石であり、教皇の玉座であった。巨大なゴシック様式の城は、当時存在した中で最大のものであった。それは巨大な竜のような要塞で、厚さ12フィートの要塞壁、胸壁、塔、矢狭間を備えていた。

二重宮殿として広がる構造で、二つの四角形の広場を誇っている。その両翼には巨大なホールがあり、その中でより大きく重要なものは枢密院、評議会、

宴会場や宝物庫。その奥深くには、広大な教皇領のブドウ畑から収穫された無数のワインが、巨大な木樽に貯蔵された巨大な地下室があった。中心部には、地獄のような炉があり、一日に何万個ものパンが焼き上げられ、アヴィニョンのパピロニアの財宝を育てていた。教皇宮殿は、壮大なスケールで造られた中世の怪物に他ならなかった。その獣は、まさに巨大だった。

宮殿の中には、腐敗、富、根深い不正、権力、そして絶大な権威がうごめき、絶えず蠢き、縮み続けていた。城の廊下は、枢機卿や教皇庁の役人、教皇の護衛や従者、評議員や法執行官、卑しい眼差しの側室、騎士とその主君、訪問する高官とその護衛、教皇の著名な親族や私的な接待役など、常に人で溢れかえていた。

ベネディクト12世の治世中、枢機卿団には24人の枢機卿が在籍していた。その中でもブラージ枢機卿は、ほとんどの枢機卿から嫌われていた、いわば猛獣のような存在だった。最年少の枢機卿の一人、ジャン＝フランソワ・ブラージは、背が高く、金髪で、健康そのものだった。しかし、彼の最も特徴的な、そして不気味な点は、その目にあった。澄んだ茶色の目と、盲目で乳白色の目が合わさって、まるで悪魔の視線を思わせるような目つきだった。公式行事以外で彼と付き合うことを許容する枢機卿はごく少数だった。しかし、ブラージにとって必要なのは、自分のニーズを満たすだけの影響力を持つ枢機卿たちだけだった。彼らのほとんどは、教皇宮殿で監督官を務める上級枢機卿たちだった。

アヴィニョンでは、高位の枢機卿が宮殿の様々な棟、広間、礼拝堂、敷地の管理を任されるのが慣例だった。ブラージは長年、大地下室の管理責任者を務めていた。この広大な地下室は、1337年に掘られた地下通路で、上階にコンクラーベホールがある棟の全長にわたって広がっていた。

この巨大な地下貯蔵庫には、ヨーロッパ屈指のワインを熟成させた何百もの樽が保管されていた。ブラージは、ブドウの収穫から樽詰めまで、ワインの保管や安全管理に至るまで、生産のほぼすべての側面を担当していた。このワイナリーは、教皇庁の年間収入のかなりの部分を占めており、非常に重要な役職とみなされていた。

このように、宮殿に関して言えば、ほとんどの人はブラージを「ワインの枢機卿」とみなしていた。

さらに、あらゆる目利きは、ブラージと親しくなることは大セラーと親しくなることだと知っていた。宮殿のパントリーと

ボテイユリー（ボトル倉庫）と、非常に肥満体でありながら繊細なり口・ジュリン枢機卿、

厨房と宴会場の責任者は、自らを美食家とみなし、それぞれがワイン担当枢機卿との親交を深めるよう努めていた二人だった。ブラージは、この二人がなぜ枢機卿に接近するのかをよく知っていたが、それでもなお、少なくとも、明らかな仲間意識が感じられる。

はるかに規模の大きい枢機卿団とは異なり、外典会議には枢機卿はわずか3人しかいなかった。上級評議員のハドゥール・ザビエル枢機卿、最年長で最も虚弱なアヴィット・バジリスト枢機卿、そして最年少で最も最近任命されたエドマール・リーン枢機卿である。遺体。枢機卿ザビエルの奉仕は、裸で首を切断された遺体の発見で終わった。農民の少年がアヴィニョンの西の道路脇の茂みで彼の遺体を発見した。彼の周りの茂みには、彼の護衛たちの遺体が散乱しており、彼らの遺体も同様に汚されていた。彼の殺害は謎のままだった。殺人の噂が消える前に、教皇ベネディクトも亡くなった。数人の枢機卿はベネディクトが毒殺されたと主張し、一連の殺人はより大きな政治的陰謀の一部であると主張したが、そのような憶測は立証されなかった。ブラージは教皇のワインに最も近かった人物であり、しかも暴君でもあったため、多くの人々が彼を毒殺犯だと疑ったが、彼の激しい気性に対して、誰も彼に立ち向かう勇氣はなかった。

ベネディクトの国葬から2週間も経たないうちに、フランス人が多数を占めるコンクラーベは、アヴィニョン教皇庁の5代目の後継者として、別のフランス人、ピエール・ロジェ・ド・ボーフォールを急遽選出した。ド・ボーフォールはクレメンス6世と名付けられた。選挙には、枢機卿団と枢機卿会議、事務総長、総代理と副摂政、ナポリ王国の教皇庁高官、著名な司教、そして取り巻きのほとんど全員が出席していた。

出席者全員の出席が必要だった。フランス国王フィリップ6世・ド・ヴァロワからの使節は、式典に間に合うように到着が遅れたため、欠席していた。

この選挙の権力は表向きは枢機卿団にあった。しかし、教皇の真の影響力がごく少数の者、すなわち外典会議の手に握られていることを知っていた者はごくわずかだった。数世紀を経て、枢機卿団はその役割を教会の選挙機関へと発展させ、今や聖なる

議会機関が全体組織に奉仕するのとほぼ同じように考えてください。対照的に、外典会議は、小規模で秘密裏に、意図的に記録に残されなかった教皇機関であり、枢機卿団に匹敵する権威を行使していました。

外典は、神以外のいかなる支配も受けず、地上における神の選ばれた代理人、すなわち教皇にのみ責任を負うものであった。

外典は、上院と下院という二つの異なる階層から構成されていた。

上座評議会は、教皇と教皇が任命した枢機卿で構成され、枢機卿は下座評議会の修道院長と修道士を監督した。設立以来、この評議会のメンバー数は60人から66人の間で変動し、それぞれが上座評議会によって任命された。評議会への任命は終身であり、新しいメンバーは既存の任命者の死後のみ任命された。上座評議会の最初の3人の枢機卿のうち2人、バジリステとリーンはアヴィニオンに住んでいた。

シャトー・ルージュと呼ばれる別荘で。しかし、下級評議会のメンバーは、フランスとイタリアの奥地にある、同等の規模で人里離れた2つの修道院に均等に分かれていた。これらは、フランスのオーヴェルニュ地方の丘陵地帯にあるアベイ・デ・ガルディアン（衛兵修道院）と、イタリアのウンブリア地方の奥地の山中にあるモナステロ・デル・カンチェッロ（カンチェッロ修道院）である。

下公会議のガルディエンス修道院は常駐修道院長ヴォーニヒの指揮下にあり、イタリアのカンチェッロ修道院は常駐修道院長ドミンガスの指揮下にあった。下公会議の両修道院長は上公会議の枢機卿にのみ報告し、枢機卿は秘密裏に教皇にのみ報告した。これらの孤立した修道院は自らをベネディクト会とみなしていたが、ベネディクト会の修道規則に従って統治されていなかった。彼らはベネディクト会でもフランシスコ会でもシトー会でもない独自の修道会を創り出していた。何世紀にもわたり、これらの修道院は

修道院の規則から切り離されたままで、外典会議の独占的な支配下に置かれた。会議とその二つの修道院は、尊敬されるサークルと共に召使いたちの中には、表向きは一種の「聖霊」のような存在で、教皇庁の最も恐ろしい秘密を守護する者がいた。しかし、ルシファエルから逃れられる秘密はほとんどなく、特に公会議の秘密はそうだった。

こうして、ルシファエルが死の息吹でアジアを荒廃させている間、彼女はヨーロッパでも同様に二つの国を欺くことに専念していた。結婚によって、フランスとイングランドは王家の血筋を交錯させた。要するに、国王が亡くなり、イングランドはフランスに対する正当な権利を得たのだが、問題は細部にあった。いずれにせよ、絡み合った王国は行き詰まり、鐘が鳴り響いた。そして、そこから百年戦争の幕開けが告げられた。これらの戦いの最初の戦い、歴史上最も恐ろしい戦いとなる戦いは、フランスの地で繰り広げられ、永遠に血塗られたクレシーの戦いと呼ばれることになる。蒸し暑い8月の午後に起こった恐ろしい出来事を、多くの人々が目撃することになる。

クレシ・アン・ポンチュール ～北フランス～1346年8月

嵐の名残だけが残っていた。雷鳴は西へと轟き、稲妻が

遠くの丘陵地帯に雷雲が突き刺さった。光り輝く黒いワタリガラスが、風に歪んだ樫の木の枝の間に止まり、傷んだ葉を数枚揺らした。その黒い瞳は、まるで何かの機械が漆黒の目を操っているかのように、冷たく機械的に膨張したり収縮したりした。ワタリガラスは頭を揺らし、遠ざかる雷雲に向かって二度、そしてもう一度鳴いた。

その樫の木の下、フランス兵の一団が泥だらけの轍だらけの道をずぶずぶと進んでいた。

フランス人たち そのほとんどは剣よりも斧や熊手を振るうことに慣れた農民たちだった。は、北フランスの湿った丘陵地帯を戦場へと行進していた。新しく即位したフィリップ6世は、イングランドの「犬」エドワード3世に、フランスはイングランドはおろか、誰とも王位を分かち合うことはないと告げていた。フィリップは、フランスは主権国家であり、その王位は自分だけのものだと言明した。フィリップの無謀な主張に激怒したエドワードは、それ以来彼を王位から引きずり下ろすことを決意し、フランスを縦横無尽に駆け巡り、行く先々で村々を焼き払った。彼はフィリップを失脚させるのに十分な損害を与えることを決意していた。

彼自身の軍勢。エドワードの大胆な攻撃の知らせがフィリップに届くと、彼は侵略者に対して進軍するために多くのフランス貴族を集めた。

フィリップの召集令状があまりにも大きかったため、クレシー＝アン＝ポンティユー上方の平原でフランス軍の大軍に直面したエドワードは、彼との交戦を拒否し、北のカレー方面へ逃走した。フランス軍は自信に満ち、迅速な勝利を確信していた。

フィリップの軍勢は巨大で、多くの領主の軍隊で構成されていた。たとえそのほとんどが農民であったとしても、3万5千人以上の規模で、イングランド軍を数で上回っていた。

3対1という圧倒的な兵力差にもかかわらず、フランスの貴族とその騎士たちは、農民や商人の集団とは容易に見分けがつかない。彼らは立派な馬に乗り、旗を掲げ、重装甲に身を包み、貴族らしい誇り高い風格と、ベテラン兵士特有の厳しい決意を湛えていた。

長剣、メイス、盾が装甲をまとった馬にぶつかり、槍の列が整然と並ぶ歩兵の隊列の間を揺れ動き、クロスボウを積んだ荷車が轍だらけの地形を重々しく進んだ。千の鞍がきしみ、千頭の馬が息を切らし、蹄を鳴らした。

叫び声による命令が隊列から隊列へと伝えられる中、男たちの集団が歌を歌っていた。

彼らが後に残してきた畑と収穫物。湿った8月の空気の中、戦争の音は運命に向かって石のように行進する男たちへのレクイエムを奏でていた。兵士たちは、迅速かつ決定的な勝利と多くのイギリス人捕虜の獲得を確信して向こう見ずだったが、彼らの内には、戦争前夜の臆病な豚のような不安が渦巻いていた。

虐殺。共有された精神状態は、明確なレベルの神経質さを露呈し、具体的な予測というよりもむしろ非物質的な予感を生み出した。それは、骨の髄まで染み渡る、ぼんやりとしていながらも徹底的に気を散らす意識、差し迫った破滅の感覚だった。

戦馬でさえその核心を捉えていたが、戦場のはるか上空の節くれだつた櫛の木に止まった同じ光り輝く黒いカラスがそれを最もよく理解していた。

それはすべて、目に見えない悪魔自身の存在であり、そして彼女の傍らには、もう一人、いつでも出動できる天使、すなわち死神がいたのだ。

兵士の列の真ん中で、重装甲の騎士2人が鎧をまとった馬に乗って肩を並べて進んでいた。胸当ての上には、同じ紋章が刺繍された袖なしの胴着がかけられていた。鞍敷きと盾にも同じ紋章が飾られていた。騎士たちはラオンのアメレット卿の旗の下にいた。彼らは兄弟だった。

6年の歳月を隔てて生まれ、ブラージ家の紋章と由緒ある姓を名乗っていた。

ジャン=ジャックとジャン=ルネはブラージ三兄弟の末っ子で、長男はジャン=フランソワだった。

奔放な性格だったジャン=ジャックとは異なり、ジャン=ルネは妻のアルゼー・ブラージと一人息子のミシェル・ブラージとともに、ランスの町の北郊外にある由緒あるブラージ家の領地内のシャトーに住んでいた。領地の他に、ジャン=フランソワはアヴィニオンにある教皇所有の大きなシャトー、シャトー・ルージュにも住んでいた。彼はこの2階建てのシャトーを他の教皇高官数名と共有しており、彼らの豪華な居室は一つの屋根の下に集まっていた。

ジャックはリンゴの最後の果肉をかじり取り、弟のヘルメットに向かって投げつけた。芯はルネの上げたバイザーに当たり、バイザーはボタンと閉まった。ルネはそれを素早く持ち上げ、苦々しい表情を浮かべながらも、まっすぐ前を見つめていた。ジャックは笑い、弟の頑固な表情をよく見ようと、愛馬の上で身を乗り出した。

「さあ、ルネ」と青年は微笑みながら言った。「戦いの前には笑いが気分を高揚させるものだ。俺はエドワード王じゃないんだぞ、ル・プティ！」ジャックは腰に下げた袋から新鮮なリンゴを一つ取り出した。

ルネは冷ややかに答えた。「兵士たちは突撃の準備ができていない。行軍で疲れ果てているのだ。」

「イギリス人を海に追い込んでやる！」ジャックはリンゴを高く掲げながら宣言した。「エドワードの口にリンゴを詰め込んで、海の向こうに投げ飛ばしてやる。それに、お前の優しい兄様だから、イギリスの従者を一人捕まえてやるよ、ルネ」と、リンゴを一口かじりながら、くすくす笑いながら付け加えた。

「彼らは防御態勢を整え、突撃に備えなければならない」とルネは述べた。

「彼女たちは幼い少女のように疲れ果てているだろう」と彼の兄は反論した。「彼女たちは何日も戦いを経験してきたのだから。」
彼らは我々の数を見れば、武器を捨てて降伏するだろう。」

「彼らは降伏しない。エドワードと黒太子が共に彼らと共にいる。彼らは死ぬまで彼らを守るだろう。愚かなことを言うな。」

「奴らは疲れているんだ」と若い男は言い張った。「降伏するだろう。愚かなのはお前だ、ルネ。戦いが終われば、その愚か者に自分が何者か思い知らせてやる。もし戦いがあればの話だが。」

「ジャック、お前には命令がある。私と同じように、それに従わなければならない。国王陛下の元帥は、兵士たちが一日の行軍を終えて体力が回復するまで、すべての旗を休ませよう命じたのだ。」

「周りを見てみる、ルネ。奴らの目を見てみる、その気迫を！奴らは休むことはない。血が沸騰している。奴らは攻撃するだろう。命令に背いてでもな。」ジャックはそう答えた。

「これらの兵士の多くは、我々のように戦場を経験したことがない」とルネは彼に念を押した。「そして我々は命令に縛られている。アメレット卿の命令に、そして陛下の旗の下に」とルネは吐き捨てた。「我々は休むように命令されている。行動命令が出るまでは、エドワードに対して動いてはならないのだ。」

二人はゆっくりと進む軍隊を見渡しなが、短い沈黙が二人の間に流れた。

その隊列は、彼らの前も向こうも、起伏の多い地形を延々と伸びているように見えた。ジャックは嫌悪感で顔を歪め、ルネの方を向いて言った。「もしこの素朴な男たちが、ほとんど盾も鎧も持たずに、イギリス人のために命を懸けるのなら、私も馬に乗って彼らを守る。フランスに忠実な騎士なら誰でもそうするだろう。我々はフランスに仕えているのだ。この男たちはフランスそのものだ。私は彼らを守る！」

「親愛なる兄弟よ、思い出してほしい。君は誓いを立てた。もし破れば死刑に処されるという誓いを。そして、君はブラージュ家の名誉を永遠に失うことになるだろう。この日は、良くも悪くも、ブラージュ家の全ての人々に大きな影響を与えることになる。」

ジャックはルネの声が聞こえていないかのように、じっと前を見つめていた。

「くそっ、ジャックめ」ルネはそう唸りながら、フェイスガードをパチンと下ろした。

やがてジャックは尋ねた。「君もフランス軍に加わるのか？」

ルネはバイザーを上げ、「ジャック、君は完全にバランスを崩しているよ」と答えた。

ジャックは顔をしかめて、同じ質問を繰り返した。「そうするのか？」

「お前は騎士なんかじゃない。せいぜい鎧を着た愚か者だろう。」

「では、そうするのですか？」

「私はジャン＝フランソワに、戦場で彼の愚かな兄の傍にいなかったとは告白しないだろう。」

「そうだ」とジャックは言った。「彼の言う通りだ。十字架は我々二人と共にあるか、あるいはどちらにもないかのどちらかだ。」

「確かにそうだ」とルネはため息をついた。彼はジャックの方を向き、叱責した。「君は私にほとんど選択肢を与えない。それが楽しいんだろ？」ルネの眉間のしわが消え、代わりに乾いた笑みが浮かんだ。「私はフランス大道芸人と共に乗らなければならない。仕方がない。」

ジャックはくすくす笑い、弟の方に身を乗り出した。「周りを見渡せ。ルネ、お前と同じように、俺は男の心を知っている。こいつらはル・プティを海に投げ込むまで休まないだろう。勝利は既に我々のものだ。間もなく、エドワードの首と王位を手に入れるだろう。我々の

枢機卿の兄弟の十字架よ、我々が勝利へと突き進むことができますように。」

リングを投げ捨て、ヘルメットを脱ぎ捨てると、ルネは胸当ての下から細い金の鎖を引き抜いた。その鎖には、兄のジャン＝フランソワ・ブラージが所有していた宝石がちりばめられた十字架がかなりの重さで支えられており、後に故ベネディクト12世教皇自身によって祝福されていた。フランソワは、ルネとジャックに、あらゆる戦いにこの十字架を携えるよう強く求めていた。その時が来たように、ブラージ家の十字架を身につけるのはルネの番だった。これは、ルネが兄に加わることを強いられた理由の一つだった。

ジャックが突撃したとしても、彼は弟を十字架も持たずに一人で死に直面させることはなかっただろう。また、フランス軍がどれほど愚かにも団結しようとも、単独で戦わせることもなかっただろう。彼は同胞にも弟にも、形は違えど等しく献身していた。彼は両方を守り、両方を敬った。ルネは舷側に身を乗り出した。

馬から十字架を降ろし、ジャックに手渡した。ジャックは冷たい金属にキスをし、敬意を表して軽く頭を下げた。雷鳴が田園地帯に響き渡った。ジャックは笑い、それを吉兆として歓迎した。彼らの頭上、ずんぐりとした樅の木の枝には、光り輝くカラスが羽をひらひらさせながら動き出した。止まり木から飛び立ち、北西の地平線に向かって、イングランド軍の方へ飛び去った。

「至高なる主と聖ドニの御名において」とジャックは冷徹な厳粛さで呟いた。ルネは馬にしっかりと跨がり、同じように敬虔な祈りを捧げた。彼は十字架を胸の元の位置に戻して、兜をかぶった。

騎馬兵たちが軍隊の隊列を駆け下りながら、「準備せよ！準備せよ！」と叫んだ。武器だ！隊列は突進した。

フィリップの軍はエドワードに追いつき、エドワードにはもはや向きを変えて戦う以外に選択肢はほとんどなかった。イングランド王はクレシー村近くの広い丘に騎馬騎士と槍兵を配置し、その前後には弓兵を、後方にはさらに多くの馬の傍らにヨーマン兵を待機させた。エドワードは丘の頂上にある占拠された風車の中から指揮を執った。

ほんの短い間、北東へ急ぎ足で飛んでいた興奮したカラスは、荒れた耕地を横切り、わずかな尾根に隠れた人里離れた茂みに飛び込んだ。鳥の輝く姿はアザミとイチイの木々の間を強く照らし、その耳障りな鳴き声は風下で用を足していた若いイギリス人弓兵を驚かせた。「不吉な日に不吉な兆候だ」と弓兵はカラスを見つめながら囁いた。そして、鳥は彼を見て、彼の内面を見透かし、その不自然な視線が彼の魂を貫いたようだった。彼は膝をつき、頭が爆発しないように必死に頭を抱えた。彼は息を荒げ、うめき声を上げ、地面に崩れ落ち、息絶えた。

悲鳴を上げ、激しく羽ばたいた後、その鳥もまた死んでしまい、羽毛をまき散らしながら下草の中に落ちていった。

死んだ弓兵の目がパッと開いた。彼は地面から起き上がり、虚ろだった。白目は洗い流され、カラスの羽のように光り輝き、黒く染まっていた。彼は木の幹に立てかけてあった長弓を取り出し、矢筒を背中に担いで、来た時よりも満ち足りた気持ちで森を出た。膀胱は空っぽになったものの、彼の心は満ち溢れていた。鼓動しない胸の中で煮えたぎる黒い悪意で満ち溢れていた。彼は茂みを突き抜け、500人の兵士を挟むように配置された、千人近い弓兵の堅固な陣形にたどり着いた。その陣形は、東の浅い谷を見下ろす高台に位置していた。背後には

彼らと西側には、さらに数千人の兵士が二つの完璧な正方形の陣形を組んで待機していた。彼は仲間の中に加わった。

ジャック・ブラージュの予言通り、フランス軍は指揮官が制止する間もなく無謀にも戦場に突撃した。谷では、叫び声を上げる武装兵、槍兵、ジェノヴァの弩兵、そして騎乗したフランス騎士の無秩序な集団が、イングランド軍が占拠する尾根に向かって突進した。乱戦には秩序はなく、兵士たちは血に飢えたように互いを地面に叩きつけ、中には串刺しにする者もいた。自らの不器用な手で剣を振るった。

丘のイギリス側では、魂を空っぽにした兵士が、長弓を高く掲げ、引き絞った弓兵たちの長い列の間を通り過ぎた。

「落ち着け！待て！」権威ある声が轟いた。生き残った弓兵たちは、彼の目の黒さを見て、一斉に後退し、まるで割れる紅海のように隊列が波打って散っていった。

男たちは驚愕し、「どけ！あいつには悪魔が宿っている！」と囁き合った。しかし、誰も彼を止めようとはしなかった。彼は隊列の間を回り込み、尾根を下って行進し、イギリス軍とその陣地を後にした。

「弓兵！持ち場に戻れ！」隊列の後方から怒鳴り声が響いた。クリフォード卿の声だった。その声には命令の力が宿っていたが、弓兵は丘を下るゆっくりとした確かな歩みが続けた。イングランド軍の隊列の後方では、灰色の空が広がっていた。雲が割れ、午後の太陽が雲間から差し込んだ。太陽がイギリス軍の背後にあったため、接近してくるフランス軍は視界を奪われた。

自らの弓兵隊の中にいたウォリック伯とオックスフォード伯は、「クリフォード卿、弓兵を戻せ！諸君、兵士たちを構えさせろ！」

悪魔の弓使いは矢筒から矢を一本抜き取り、歩みを止めることなく長弓に深く引き絞った。彼の黒い瞳は、谷の奥深くにある二つの輝く点に釘付けになっていた。

「弓兵！戻れ、さもなくば背後から倒すぞ」とクリフォード卿は命じた。弓兵は尾根を下り続け、その暗い姿は混沌とした景色の中で不気味なほど際立っていた。フランス軍が進軍してくる。クリフォードは馬を前進させ、旗手もそれに続いた。彼は弓兵の一人のそばに立ち止まり、その場に立っている孤独な戦士を撃ち落とすよう、低い声で命令した。

「背後からですか、閣下？」弓兵は不安そうに尋ねた。

「前に出て、あの男を撃ち落とせ！今すぐやれ、弓兵！」クリフォードはそう言い放ち、退却していく人物に向かって激しく身振り手振りで指示した。

「かしこまりました、閣下。」弓兵は一礼し、安全な位置に移動した。矢をつがえ、風向きを確かめ、尾根に向かって矢を放った。矢はまっすぐに速く飛び、魂を失った男の背中を貫き、胸の中央から突き出た。串刺しにされた弓兵は一瞬立ち止まり、尾根の方を向いた。イギリス兵たちは、死体が振り向いて自分たちの方を向いたのをぼんやりとしか見ることができなかった

まるで彼らに挨拶でもするかのように。誰も彼の弓から放たれた矢が尾根を駆け上がっていくのを見ていなかった。誰も

クリフォード卿の若い弓兵の目に矢が突き刺さるのを目撃した。弓兵が地面に崩れ落ちた時、初めて黒い羽根の矢が彼の頭から突き出ているのが見えた。悪魔の弓兵は向きを変え、フランス軍の突撃の轟音の中へと、そのまま戦場を駆け抜けていった。

「彼を放っておけ！」クリフォードは、歩く死人のような男を睨みつけながら吐き捨てた。「弓兵たちよ、的を探せ！私の合図で構えろ！」

しかし、皆の視線は、胴体を貫通した矢が刺さっているにもかかわらず、まるで何事もなかったかのように前進してくるフランス軍に向かって歩き続ける物体に注がれていた。

原始的なイギリスの大砲の轟音が野原に響き渡り、最初の矢の雨が降り注いだ。突撃してくるフランス兵に矢が降り注いだ。矢の猛攻によって兵士と馬が倒れ、フランス軍は意気消沈した。矢の柄には、戦場では初めて使用されるボドキン型の矢じりが付けられていた。ボドキン型の矢じりは長く重い鉄製の先端で、鎧を切り裂くことができた。イングランドの長弓は密度の高いイチイの木から削り出され、百ポンド以上の引きを必要とする丈夫な麻の弦が張られており、この破壊的な新種の矢を驚異的な力で放った。フランス騎士の金属製の鎧は、彼らを守るのにほとんど役に立たなかった。

部下たちが混乱し、慌てて倒れていくのを見て、フィリップは引き返して態勢を立て直すよう命じた。しかし彼らは命令を無視し、フィリップを通り過ぎて狂ったように谷を駆け抜けた。ジェノヴァのクロスボウ兵たちは、降り注ぐ長弓の矢の雨に晒された。

イングランド軍から遠く離れた場所で、彼らは弓を投げ捨てて逃げ出した。これを見たフィリップの弟、ダランソン伯爵は、彼らを殺害するよう命じた。こうして、その日、侵略してきたイングランド軍よりも、フランス軍の手によって戦死したジェノヴァ兵の方が多かったのである。

魂のない弓兵は、荒れ狂う戦場を一人歩いた。兵士と馬は

その黒い目が引き起こした本能的な恐怖、誰も自分を貫いた矢を気にしないかのように動き回る弓兵に近づこうとはしなかった。彼は背中から別の矢を取り出し、弦を張り、確実な動作で放った。約300ヤード先の野原で、矢はジャン＝ジャック・ブラージュの馬の前肢の間に地面に突き刺さった。ジェノヴァのクロスボウの矢が2本、死んだ射手の肋骨に命中し、3本目が彼の太ももを貫いた。しかし、彼の黒い目は標的から決して離れず、矢は彼を止めたり、彼の手を遅くしたりすることはなかった。最初の矢が止まる前に、もう1本の矢が彼の弓から放たれた。今度は外れなかった。それはジャックの鎧の襟に向かって燃え上がり、彼の左肺を貫いた。彼が馬から転げ落ちると、空から別の矢が閃光を放った。傍らで、ルネは自分の乗馬が崩れ落ちる痛ましい音を聞いた。黒い羽根のついた矢が馬の両目の間から突き出ていた。しかし、死んだ射手は不死身ではなかった。もう一本の矢を放った瞬間、クロスボウの矢が喉を貫き、ついに地面に倒れた。ルネは飛び上がり、弟のもとへ駆け寄った。兵士たちが叫び声を上げながら彼らの横を通り過ぎ、狂乱の突撃は止まらなかった。

ルネはジャックの顔面ガードを持ち上げ、地面から頭を持ち上げ、腕でそっと抱きかかえた。彼の目には涙があふれた。ジャックはこの谷を離れることはないだろうと、彼は悟っていた。

生きています。

「やめてくれ、ルネ」ジャックは無理に笑顔を作りながら、苦悶の表情を浮かべて言った。「私は名誉ある死を遂げたのだ」彼は息に混じる血を咳き込んだ。「もう一度だけ、我々の十字架を抱きしめたい」

ルネはヘルメットを脱ぎ捨て、顎を上げ、首の鎖を引っ張って十字架を胸当てから落とした。彼はそれを慌てて拾い上げ、死にゆく自分のそばに十字架を置いた。

兄の唇。ジャックはそこにキスをして、微笑んだ。

「ルネ、エドワードを倒したら、偉大なるジャン＝フランソワ・ド・フランスに私のために祈ってくれるよう頼んでくれ。」

彼はささやいた。「誓ってくれ。」

「誓って、ジャック。私も息絶えるまで、あなたのために祈り続けます。」

ルネは笑いながら涙を流した。それは兄弟の間で長年続いてきた冗談だった。彼らが

「真面目すぎる」兄弟をからかうためにつけた馬鹿げたタイトルだった。

兄：フランソワ・ド・フランス。ルネが十字架を胸当ての下に押し戻すと、兄はため息をつき、彼の腕の中で息を引き取った。

谷の向こうで、悪魔の弓使いが身じろぎをした。彼の仕事はまだ終わっていなかった。転がって膝立ちになったとき、太ももに突き刺さっていた太いクロスボウの矢が、骨ばった音を立てて折れた。矢の雨が彼の軽装鎧を貫いたが、血は流れなかった。彼は矢を張り、放った。ルネは天を仰ぎ、悲しみと反抗の叫び声をあげた。黒い翼に乗って死が彼に向かって飛んでくるのを目の当たりにしながら。地獄の矢は、呪われた魂のように地上に向かって飛んできた。それは叫び声をあげるルネの口の天井を貫き、脳を突き刺し、頭蓋骨を砕いた。彼はもう叫ばなかった。

彼の体は、血まみれで歪んだ顔に恐怖の表情を浮かべながら、死んだ兄の上に倒れ込んだ。大きく見開かれた目は、忌まわしい射手の頭蓋骨を貫いたジェノヴァの矢を見ていなかった。射手は倒れ、二度と動かなかった。

イングランド軍は約1万2千人で、その半数以上が弓兵だった。重装歩兵は弓兵の両翼を中央に取り、長さ約1800ヤードの正確なV字陣形を形成した。フランス軍は3万6千人だった。突撃する騎士たちの波状攻撃（全部で15波）がイングランド軍の矢の集中砲火に突っ込み、目の前の死者や死にゆく者たちの上に自らも倒れ込んだ。太陽に目をくらまされながら逃げ惑うジェノヴァのクロスボウ兵と、訓練を受けていない農民たちの狂乱の叫び声が戦場に響き渡る中、フランス軍は次々と倒れていった。

戦場は完全に混乱状態に陥った。無数のイギリス軍の矢が、倒れた兵士や動物たちの間に、まるで硬い麦の穂のように突き出ていた。わずか10時間の間に、高地から50万本近くのイギリス軍の矢が降り注ぎ、6000人以上のフランス兵とジェノヴァ兵が命を落とした。まさに悪魔の舞踏、邪悪なワルツだった。

真夜中が迫る中、負傷したフィリップは退却した。負傷した兵士たちをその場に置き去りにする以外に選択肢はほとんどなかった。フィリップの同盟国であった二人の王が、この凄惨な虐殺で倒れた。そのうちの一人は、盲目のボヘミア王ヨハンであった。フィリップには撤退する以外に道はなかった。しかし、エドワードは捕虜を取らなかった。真夜中、彼の息子であるウェールズ黒太子は闇夜に紛れて動き、長いナイフで負傷者の喉を切り裂いた。この戦いでフランス人は合計6600人、イングランド人はわずか数百人が命を落とした。それは、ルシファエルが最初から深く関わっていた戦いだった。功績はすべて彼女のものであり、エドワードとフィリップの両王は、彼女のはるかに壮大なゲームにおける単なる駒に過ぎなかった。彼女は女王であり、二人の愚かな王は知らず知らずのうちに、彼女の前で道化師のように馬上槍試合をしていたのだ。

戦闘後、フィリップは屈服した。アヴィニョンの枢機卿2人の仲介により、フランスとイングランドの間にはすぐに休戦協定が結ばれた。エドワードはカレーの占領を維持し、フィリップは激怒した。イングランドは騎士道精神を奪い、

戦闘のルール。白兵戦、正面からの対決 一人と一人の戦い。

人間の技量、力、勇気を駆使して戦うという従来の戦術は、敵の背後から槍で突き刺すようなものにとって代わられた。イングランドの長弓は、騎士階級にとってまさに侮辱だった。フランスの騎士たちはそれを卑怯だと軽蔑したが、遠距離戦闘はエドワードの軍隊のような小規模な軍隊にとっては非常に効果的であることが証明された。

そしてルシファエルの介入によって、戦争の技術は変化し、騎士道の栄光の日々は終焉を迎えた。

絶望したフィリップは、聖座とその膨大な数の教養ある司祭たちの助けを求めることを考えた。しかし、彼には彼らの祈り以上のものが必要だった。財政と、イングランドの新しい武器、つまり速射できる長弓とその鎧を貫通するボドキン矢に対する確固たる対抗策が必要だった。イングランドが用いる非騎士道的な戦術に対抗するための新しい戦略が必要だった。彼は、エドワードをカレーから追い出し、海峡の向こう側へ連れ戻す決定的な対抗武器と決定的な対抗戦略を求めた。それにもかかわらず、ルシファエルは、不当な扱いを受けたが外見上は常に女王の中の女王として、激しく熱心にすべての王座に攻撃を仕掛けた。聖座とアヴィニョンの教皇宮殿も例外ではなかった。教皇、枢機卿団、そして外典の枢機卿は皆、彼女のゲームでは等しく獲物だった。そして、彼女はそれらすべての中に網を張った。

シャトー・ルージュ ～アヴィニョン市～ 1347年4月

アヴィニョンのシャトー・ルージュは、数名の枢機卿が住む厳重に警備された住居だった。シャトーの裏口に駐屯する衛兵は足を動かした。左のかかるとにチクチクとした痛みが走ったのだ。ブーツの中を探ったが、鋌が刺さっている様子はなく、破片や棘も見当たらなかった。しかし、再び痛みが走った。まるで小さな短剣がかかるとを突き刺すような痛みだ。この痛みは彼に安らぎを与えてくれない。彼は静まり返った敷地を見渡した。夜も更け、物音一つしない。衛兵は自分の持ち場のアーチ型の入り口をちらりと見てから、シャトーの分厚い石壁を囲む茂みの中に忍び込んだ。ポケットを軽く叩いて、ベストのポケットに折りたたまれた紙切れを見つけると、にやりと笑った。壁にもたれかかり、ブーツの紐をほどいて紙を中に滑り込ませた。紐を結び直そうとしたその時、フードを被った人物の長い影が彼の上に落ちた。彼は慌てて体を起こしたが、危うく転びそうになった。

「衛兵。持ち場にいないな」と司祭は静かに言った。「なぜだ？」

衛兵は悔しそうな顔でアーチの方へ歩み寄り、影のような人影も彼を阻もうと動いた。「物音が聞こえました、修道士」と彼はどもりながら言った。「それはただ鶏が止まり木で寝ている音だったんです」茂みの中。」

「ああ、止まり木に止まっている鶏か。なるほど。」明るい場所では、兵士は司祭が背が高く、かなり

がっしりとした体格で、黒髪がふさふさしていた。しかし、彼は舗装石をじっと見つめているようだったが、警備員の顔に鋭い黒い目が光った。それはまるで短剣のように鋭かった。「紐をほどいたブーツでニワトリを追いかけるのか？」

「気づきませんでした、修道士様。」

「ああ、なるほど。靴紐が緩んでいることに気づかなかったんですね。」その柔らかな声は、不気味なほど矛盾していた。きらめく目を見て、警備員の歯がぴくぴくと動いた。「命令書を見せろ、警備員。」この瞬間に。

不意を突かれた兵士は この不気味な司祭がいつになったら自分を任務から解放してくれるのかと思っていたのだが、しびしび身がかがめてブーツを脱いだ。そして、間に合わせの包帯を取り出し、司祭に差し出した。

「紐をほどいたブーツの中に？ああ。」司祭は紙を広げ、壁の懐中電灯の下に立ってそれを読んだ。「なぜ命令書をブーツの中に入れていたんだ、衛兵？」

警備員はすべてを告白した。司祭はニヤリと笑い、折りたたまれた命令書を返しながらか言った。「ではどうやらあなたの命令は踏みにじられる時が一番効くようですね。この告白は私たちだけの秘密にしておきましょうか？」

「もしよろしければ、修道士様。それで、何かお手伝いできることはありますか、修道士様。えっと、衛兵は司祭の名前を思い出そうと苦労した。」

「セヴァル大司教、ルー・セヴァル大司教が、ジャン＝フランソワ・ブラージュ枢機卿に面会するため、個人的なアポイントメントでこちらにお越しになりました。」

「武器係長を呼びましょう。護衛を手配できます。」衛兵は背を向けようとしたが、司祭は彼の肩を痛々しいほど強く掴んだ。

「あなたの命令から察するに、あなたはここに赴任したばかりのようですね」と、大司祭は小声で言った。「あなたは自分の評判を落とすたくらいなのでしょう？護衛を待つ必要はありません。私は何度もここに来ています。自分の道は自分で見つけます。」

その兵士は、確かに新兵で、しかもあまり急ぎ足ではなかったが、ぼんやりとした感覚を覚えた。

彼の心を支配した。命令に従うことは絶対条件だったが、見知らぬ男に

護衛なしで城内に入る？それは考えられない職務怠慢だが、同時に、その優しい声と、きらめく瞳に込められた命令に従うこともまた、彼にとって極めて重要なことだった。

「訪問者は付き添われて来ます。私は…」

「もしかして」と司祭は口を挟んだ。「私があなたが持ち場を離れたことに気づかなかったのでしょうか？同様に、あなたが私の入室に気づかなかったのでしょうか？どうか私の言うことを聞いてください、衛兵よ。私をただ静かに止まっている雄鶏の一人として受け止めてください。もう遅い時間です。私は疲れています。私の言いたいことが分かりますか？」

警備員は目をそらしながら、「おっしゃる通りですね。私はあなたを知りません」と答えた。

私もあなたに会っていません。

「善意の嘘は悪事ではない。よくやった。その恩は三倍にして返そう」と司祭は言い、兵士には見えないように嘲笑しながら衛兵の肩を軽く叩いた。

彼はアーチ型の入り口の下に姿を消し、静かな廊下を漂った。

城。司祭は角に差し掛かり、角を曲がると、彼の顔立ちと服装は突然姿を変え、全く別の形に変身した。ローブの代わりに、フランス騎士の戦闘服を着ていた。胸には金と宝石がちりばめられたブライジの十字架。彼は角を曲がり、静かに石壁を通り抜けた。鎧をまとった顔は、音もなく巨大な石の中に溶け込んでいった。

ジャン＝フランソワ・ブライジ枢機卿の寝室では、騎士の姿が堅固な壁石を通り抜けると同時に、壁に掛けられたタペストリーが一瞬ひらめいた。枢機卿は金箔張りのベッドで身をよじり、うめき声を上げ、まぶたの下で眼球を転がしながら、その姿を追っていた。悪夢のような風景。ジャン＝フランソワは巨大なベッドの上を転がり、急速に落ちていく夢の中に閉じ込められていた。突然、彼は息を呑み、目を大きく見開いて飛び起きた。額には汗が光っていた。悪夢は、気付くと部屋から逃げ出した。枢機卿は安堵のため息をつき、ベッドに横たわり、ゆっくりと目を閉じた。そして再びパツと開いた。結局、悪夢は終わっていなかった。彼は起き上がり、心臓がドキドキした。奇妙なことに、彼の胸に何かがある宿っていた。部屋の隅には、鎧をまとった騎士の暗い人影が立っていた。

「誰だ？」フランソワは恐怖に震えながら、その影に向かって囁いた。開いた窓から差し込む月明かり。

「ジャック」フランソワは声を詰まらせた。「君なのか、ジャック？」彼は驚きのあまり両手で顔を覆った。

「我こそはジャン＝フランソワだ。お元気だったか？」騎士はいたずらっぽい笑みを浮かべているように見えた。

「ええ、もちろんです！あなたのために祈りました。お元気ですか？ルネは？」

「ルネはいつものように説教をしています。私があなたを訪ねない方が良く、彼がまとめたのです。

あなたを悩ませるかもしれません。

「いや、とんでもない」とフランソワは嘘をついた。「とんでもない！彼に来るように言ってくれ。ジャック、彼に伝えてくれ。」

「フランソワ、恐ろしいことを警告しに来たのだ」と騎士は慌ててささやいた。

「フランスはわずか20年でイングランド王エドワードの手に落ちるだろう。エドワードは多くのフランス貴族の支持を得るだろう。彼は西と北からやって来て、ブルゴーニュの心をつかむだろう。彼はフランスを分割するだろう。」

枢機卿は困惑しながら、「たとえフランスの領主のほとんどがエドワードに味方したとしても、どうして彼が勝利できるのでしょうか？彼には有能な軍隊がないではありませんか！」と答えた。

「彼は必ずそうするだろう」と騎士は鋭く言った。「彼はすでに悪魔と契約を結んでいる。エドワードに戦争の秘密を語っているのは悪魔自身だ！ジャン＝フランソワよ、お前が彼の遠征前に、いや今、彼を止めようとしないうちに、エドワードは我々の故郷を奪い取るだろう。」

フランソワの頭は混乱した。「それは狂気だ！そんなことを止めることはできない。もし私が神に話しかけたら

「この神聖さゆえに、彼は私を狂わせるだろう」と彼は正論を述べた。「君とルネは、これらの出来事を止められないのか？」

「フランソワ、これらの出来事を止められるのは君だけだ。」

「ジャック、私は王の意志を阻むことはできない。悪魔に命令することもできない。私はただのしもべにすぎないのだ。」

「よく聞け、フランソワ。」黒い人影は憤慨しながら一歩近づいた。「外典会議のことか？知っているだろう？」

枢機卿はわずかに身を硬くした。そして、しぶしぶ告白した。「ええ、知っています。ただ、その真実のほんの一部だけです。それがどうしたというのですか？」

「彼らは秘密を隠している。イングランド王を滅ぼすための武器だ。フランソワ、君はこの武器を掌握しなければならない。彼に対してそれを解き放たなければならない。だが、まず最初に、君はその正しい使い方を学ばなければならない。そのような知識は、外典のアーカイブ、いわゆる「ナラムシン翻訳」の中に眠っている。本書では、この武器の設計と仕組みについて学ぶことができるだろう。」

「では、どうすればこれらの資料に手が届くというのですか？」フランソワは納得できない様子で尋ねた。「資料館は厳重に警備されている。そして、彼らは通しの言葉を使わないとアクセスできない。私はその言葉を知らない、ジャック！資料館は評議会専用のものだ。」

「悪魔はエドワードの耳元でこの秘密を囁き、エドワードはナラムシン巻物を探し求めるだろう。それを手に入れば、彼の力は聖座をも凌駕するだろう。」

私の言葉に耳を傾けなければ、彼はフランス全土を奪い去るだろう。フランソワよ、この行動を必ず実行しなければならない。フランスと教会のためでなくとも、兄弟たちのために。我々が正当な理由と名誉をもって倒れたのだから。神の御心を行うために天使さえも堕ちたのだ。もし、より多くの者が生き延びるために、他の者が倒れなければならないのなら、それは神の御心なのだ。

フランソワは悪夢を思い出した。「他の者たち？誰が倒れなければならないのか？」

「キリストでさえ、他者が生きるために倒れたのだ。フランソワ、私は行かなければならない。」騎士はそう言って立ち去った。

「あと少しだけ！」フランソワは叫んだ。

騎士は振り返り、にやりと笑った。「あなたはフランソワ・ド・フランスですね。神にかけて、フランスを救ってください。私たち全員を救ってください。」そう言って彼は振り返り、壁を通り抜けて姿を消した。

「待って！だめだ！ジャック！ジャック！」フランソワはベッドから飛び起き、消えゆく人影を追いかけた。

彼はアパートの部屋を駆け抜け、ドアを勢いよく開け放ち、よろめきながら廊下に出た。「ジャック！」しかし、長い廊下には誰もいなかった。

兄の姿はすでに廊下を横切り、奥の壁を通り抜けて司祭の面会室に入っていった。彼はひざまずいた。「ジャック！戻ってきてくれ！」彼はすすり泣いた。重たい目をした客たちが眠そうにドアから顔を出すと、ドアが軋む音がした。

眠っていた司祭は、部屋の外から聞こえた叫び声で身じろぎしたが、目は開かなかった。

ベッドサイドのオイルランプが、彼の胸の上に伏せて置かれた聖書を照らし、彼はその上で両手を組んでいた。騎士はベッドの足元に立ち、夢を見ている男を見下ろしていた。騎士の鎧の板はゆっくりと溶け合い、変化し始め、死人のように青白い、豊満な肌の女性の輝く肌へと溶け込んでいった。完全に、彼女の目、爪、そして腰まで届く乱れた髪はすべて黒檀のように黒かった。彼女は純粋で恥知らずなイヴの化身であり、すべての女性が墮落した源であり、同様にすべての男性が失敗した源でもあった。彼女はルシファエルだった。彼女は司祭の上に立ち止まり、微笑んだ。彼女の青白い口から多くの女性の声が発せられた。「男が一人でいるのはもったいないわ。特に、私の下では。でも、すぐにね。」

司祭は顔をしかめ、夢の中でうめき声を上げ、横向きに転がった。開いていた聖書が床に落ち、彼女の素足のかかどがそれを踏みつけ、城の外壁を通り抜けていった。聖職者の夢を悩ませるのは、不敬な笑い声の残像だけだった。

そして、ルシファエルの笑いはまさに当然だった。邪悪な種が根付くまで、わずか一ヶ月も経たなかったのだから。

シャトー・マロウ ～アヴィニヨン市～ 1347年5月

枢機卿団に属していたシャトー・ルージュとは異なり、アヴィニヨンのシャトー・マロウは外典会議に属し、枢機卿バジリストとリーンの住居であった。リーンは教皇の使節としてイングランドに滞在していたため、年長の枢機卿はシャトー・マロウに一人でいた。自室で、バジリストはぐっすりと眠っていた。手紙机の上には、ほとんど消えかかっていた油ランプが炎をかるうじて上げ、近くの羽根ペンとインク壺、そして書かれた手紙の上にゆらゆらと揺らめく影を落としていた。手紙にはこう書かれていた。

最愛の枢機卿リーン～

私の勇気のなさをお許してください。しかし、最も深刻な恐怖が私の魂よ。枢機卿ザビエルの死は偶然ではなく、闇の勢力が我々に敵対していると確信した。彼らは我々が守っているものに近づこうとしている。お願いだ、すぐにアヴィニヨンに戻ってくれ。そして私たちは共に、教皇クレメンス猊下との謁見を強く求めます。猊下には危険を警告しなければなりません。急いでください、友よ。私は自分の身の安全を案じ始めています。

聖下の御奉仕において～バジリステ枢機卿

爽やかな風が炎を消し、後部窓がゆっくりと開き、移り変わる人影が見えた。反逆者の衛兵がバジリステの寝室に忍び込み、彼の胸にまたがり、枢機卿の口を強く手で塞いだ。それから彼は短剣を抜き、尋ねるべきと言われた質問を囁いた。バジリステは抵抗したが、屈強な兵士にはあまりにも弱すぎた。侵入者は不吉な囁きで、叫ぶなと警告した。首筋に突きつけられた冷たい鋼鉄が、その脅しをはっきりと物語っていた。兵士は手を離し、返事を待った。

バジリストは反抗的に、シルエットになった顔をじっと見つめ、何も言わなかった。ナイフはゆっくりと枢機卿の左目に向かって動き、浅い血の溝を残した。バジリストは歯を食いしばった。歯を食いしばり、声も出さなかった。手が再び彼の口を塞ぎ、頭を枕に深く押し付けた。バジリストの胸を体重で押さえつけながら、衛兵は短剣を目の下の柔らかい肉に突き刺した。ナイフが眼窩の壁を削ると、バジリストは鼻から悲鳴を上げた。衛兵は目を床に投げ捨てた。老人の抵抗力はいくらか弱まっていたが、兵士は老人に、まだ交渉できる片目が残っていると告げた。

バジリステはすぐに話し始め、知っていることをすべて話した。話し終わると、衛兵は通行の合言葉が正しいことを確認するため、それを復唱するように要求した。彼はすすり泣きながら真実を語ったと誓ったが、それでもナイフは枢機卿の右目に突き刺さった。バジリステは再び冷たい手に叫び声をあげた。そして再び、彼は繰り返すように求められた。その言葉。彼は息を呑み、どもりながら言った。言葉は同じだった。自分が収集を依頼された情報を引き出したと確信した衛兵は、バジリステの胸の上に身を乗り出し、彼の肺から空気を押し出した。枢機卿が沈黙すると、暗殺者は窓枠を滑り降り、静まり返った夕暮れの中に姿を消した。

しばらくして、彼はあの凄惨な事件の後に取り決められた秘密の場所で後援者と会った。革の財布が手渡され、雇われた殺し屋はアヴィニョンの西門を出てローヌ川の橋を渡った。しかし、1マイルも進まないうちに、待ち伏せしていた情報通の盗賊がブロードソードで彼の首と財布を奪い取った。残忍な殺人の証拠はフランスの田園地帯に消え去った。そして、その犯人であるジャン＝フランソワ・ブラージュ枢機卿は、外典公会議の秘密、ひいては厳重に守られた二つの修道院、ガルディアン修道院とカンチェロ修道院の秘密を握る鍵を手にしたのである。

【第2章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~